

《書評》

田村紀雄著 『エスニック・ジャーナリズム』

柏書房 2003年

山崎隆広

1. はじめに

大新聞なら世界の大都市のほとんどでその衛生版をタイムラグなしに読むことができ、日本語のPC環境さえあればいつでもインターネットで日本のニュースを読める時代に暮らす我々にとって、80年以上も前、遠くカナダの地で、まさに自分達の生存を賭して日本語新聞の発行を続けた人々がいたということを想像するのは、決して容易なことではない。いったい彼等はどのような思いで日本語新聞を発行し、また読者はそれをどのような思いで読んでいたのか。

『エスニック・ジャーナリズム——日系カナダ人、その言論の勝利』は、カナダにおける日系人達のホスト社会との闘いと共生の歴史を徹底的なフィールドワークのもとにあぶりだした、田村紀雄教授の圧倒的力作である。人種差別、労働運動史、戦争とナショナリズムの関わりなど、読み方に応じて様々なテーマを提起してくれるこの重層的なテキストから、我々は何を読み解くべきなのか。

限られた紙幅のなかで、今回私が本書の読み解きのテーマとするのは、メディアは何を契機として、どのように生じてくるのだろうかということだ。

絶え間なく訪れる試練を潜り抜けながら、カナダの日系人達が新聞発行への情熱を傾けていた時、そこにはどのようなメディア空間が出現していたのだろうか。そのままハリウッド映画の原作にもなりそうな本書の壮大な人間ドラマをただ“評する”のではなく、時に作中の登場人物達と“寄り添う”ようにしながら、そのコミュニティ・メディアとしての足跡を辿って行きたいと思う。

2. 成立と発展の軌跡

(1) 揺籃期 (1920~1935)

本書で田村が主な研究対象として焦点を当てるのは、1924年にバンクーバーで鈴木悦に

田村紀雄著『エスニック・ジャーナリズム』

よって創刊された『日刊民衆』と、1938年に創刊された日系カナダ紙『The New Canadian』の2紙である。

19世紀後半から主にカナダ大西洋岸地域に移民した日系人達は、当初ブリティッシュ・コロンビア州を中心に木材産業などの単純作業に従事していたが、1920年頃から深刻化する不況期に「キャンプ・ミル労働組合、ローカル31」なる労働組合を発足させる。この組織は、白人雇用主から自分達の給与の上前をはねる日本人「ボス」の存在を排除しようという動きから生まれたが、『日刊民衆』はまずその機関紙として発刊されたものだった。

私がまず注目するのは、この『日刊民衆』が、対雇用者にむけて労働者の団結を促すような機関紙としてのオルグ機能だけではなく、移民して間もない日系人達への「啓蒙」の役割も果たしていたということである。

『日刊民衆』および『The New Canadian』において中心的役割を果たす梅月高市は、1935年10月15日発行の『日刊民衆』の「キャンプミル労組の15年」と題する記事で、こう述べている。

「カナダに於ける日本人の労働組合の大きな使命の一つは労働階級者の教育運動である。組合では創立後直に政府の公認を受けると共に、1920年8月11日（創立後1ヶ月半）には早くも機関紙として『労働週報』を発刊し、日本人社会の労働運動への啓発につとめた。労働週報は1924年3月21日から『日刊民衆』に発展し、『労働者の為めの労働者による労働新聞』として、自らの印刷所を持ち気を吐いてゐる」<sup>1)</sup>

つまり梅月は、労働組合の機関紙として創刊された『日刊民衆』を、労働者が自分達の権利を主張するためのツールというよりも、まだカナダの社会では無力な「弱者」であった日系労働者達に、自分達の置かれた位置を正しく認識させる為のツールとして意識していたのだ。

さらに興味深いのは、梅月がこのメディアを通じて、異国で働く労働者達に「日本人らしく」生きよと促すのではなく、むしろ彼等にカナダの社会に積極的に「同化」せよと訴えていたことである。

「出稼ぎ根性の消滅をはかり、社会的責任の自覚を促し、団結して、生活改善をはかると共に、カナダ労働者階級の代表的な健全な運動に合流する方途を講ずるほかはない」<sup>2)</sup>

梅月が、決して「長いものには巻かれろ」的精神ではなく、異国での共生を実現させる術として、発刊間もない『日刊民衆』というメディアを認識していたというのは、非常に示唆的である。

## (2) 挫折期（1937～1941）

しかし、そうした梅月達日系人のカナダ社会へ溶け込もうという運動にも、暗雲が立ち始め始める。1937年から始まった日中戦争、そして1941年12月8日の太平洋戦争開戦である。

日米開戦を契機として、日系人の強制収容、強制離散、強制帰国の動きが本格化するわけだが、この時『日刊民衆』編集委員の永沢六郎は、帰国に際しての編集上のアドヴァイスとして「日本のラジオ・ニュースを多くする必要がある」<sup>3)</sup>と残している。

だが、本書で田村も指摘している通り、この発言は『日刊民衆』が置かれたアンビヴァレントな状況を、非常に端的に表している。つまり、連合国にとっては敵国である日本の「ラジオ・ニュース」が流す情報は、ホスト社会であるカナダに忠誠を誓い、「労働運動を通じて同化する」べく努めてきた日系人達の思いと、大きく矛盾するのである。

ここで、日系人達を「組織化」から「啓蒙」、そして「同化」へと向わせてきた『日刊民衆』のメディアとしての役割は、大きな挫折を余儀なくされる。ただでさえ情報が滞りがちになる戦時下において、主な読者である日系人達が最も欲していたであろう祖国の情報を報じることができないというジレンマだ。

1941年12月8日、日本語新聞『日刊民衆』は政府から発行停止処分を受けるが、それ以前に「同化」「敵国情報の禁止」といった自己矛盾を抱え込んでしまった時点で、同紙は既に死んでいたと言っている。メディアの死とは、すなわちその内部にタブーが生まれた瞬間なのだ。

### (3) 混乱期～安定期 (1942～1945)

職を失った梅月高市が、次なる職場としてもぐりこんだのがカナダ生まれの日系2世達を主な読者ターゲットとする『The New Canadian』であった。同紙は日系2世を対象にした日英両文表記の新聞であるということで、何とか発行停止処分を免れていたが、その代わりに「『政府の全統制に協力し、個人的権利を犠牲にする意志』を論説で何度も表明」<sup>4)</sup>せざるをえなかった。

1942年4月21日号では、ついに紙上で「BCSC (British Columbia Security Council) がカナダ内に在る日本人に公式な情報を伝えるための公認の機関紙となつた」<sup>5)</sup>と明示している。自ら政府の御用紙となったことを宣言したようなものだが、ここからまず伝わってくるのは、報道の意義云々といった大義名分を主張している余裕などない、当時の『The New Canadian』の逼迫ぶりである。おそらく、道路工事などの現場に動員され、さらにやがて東部への強制移動を余儀なくされる日系人への貴重な情報源として、なりふり構ってられないという状況だったのだろうと想像できるが、そこにはナイーヴな観念論よりも、むしろ非常時を何とか乗り切ろうという彼等なりのしたたかさが透けてみえるように思える。

その後しばらくの間、カナダの世論はもっぱら『The Sun』『The Gazette』『The Province』といったカナダの英文紙によって形成され、結果として日系人排斥の機運が高まっていく。「行政は世論に動かされ、世論は新聞によって誘導され、新聞は加速度的に増大する『投書』によって冷静さを失っていった」<sup>6)</sup>のだ。

やがて、多くの日系人1世や2世の子ども達は、大西洋岸のバンクーバーからより内陸のロッキー山脈東側の小さな街・カズローに強制的に追いやられることになる。『The New Canadian』もそれとともにカズローの街に移るが、この移転は、同紙が経験した度重なる移転劇の中でも、特に大きな転機となったのではないかと考えられる。それまで『The New Canadian』はカナダ政府の方針を日系人達に伝達するオフィシャルな回路として機能していたが、引き続き政府からの厳しい監視はあったにせよ、人口400人程度のゴーストタウンに追いやられた日系人達にとって、同紙は、離散した家族や知り合い同士をつなぐ重要な回路として、これまで以上に日系人社会に密着した大事な役割を果たすようになったと思われるからだ。

この点については、田村も「カズロー時代2年4ヶ月の *The New Canadian* 紙は、その社史の中では、最初の比較的安定的な時期であったといえる。これは皮肉にも、戦争に、日本人がエスニック集団としての危機感をもち、また初めて独自の自治機関、教育システム、民主的なコミュニティ制度をもち、また新聞も、一種の『規制下の独占』、さらに各種の庇護があったこと、などによるものであった」<sup>7)</sup>と指摘している。実際に、この時期は『The New Canadian』にとって、決して多くはないがある程度安定した広告収入がはいりだした時代であったことは、田村も詳説している通りだ（第8章参照）。

知り合いもなく心細い日系人達のネットワーク化を助けるメディアとして、読者と緊密に寄り添いながら機能していくという、ある意味では同紙がコミュニティ・メディアの本義を最も体現しえた時代だとも言えるのではないだろうか。

#### (4) 確立期（1945～1948）

だが、『The New Canadian』の安定は長くは続かなかった。日本軍の敗色が濃くなるにつれて、カナダ政府は日系人達を以前とはまた異なる理由で排斥し始めたからである。開戦初期、日本海軍の優勢が伝えられていた時代、カナダ政府は軍事的な理由から日系人の隔離政策を行ったが、終戦間際、今度は政府は明らかに人種的な理由から彼等の追放を始めたのだった。

1945年8月14日（現地時間）、日本の無条件降伏をもって戦争が終わりを告げた頃、『The New Canadian』はカズローからさらに東進し、マニトバ州ウィニペグの街に辿り着いた。

カナダ政府の日系人達に対する仕打ちが再び激しさを増していたこの時期、『The New Canadian』もまた、大きな転換期を迎えていたことを、田村は鋭く指摘する。「政府の緊急な『告知』は姿を消したし、援助も公式的には打ち切られ、保護も小さくなり、より自立した新聞社に整備されて」<sup>8)</sup>きたのである。もはや軍事的には脅威でなくなった敵国・日本に対する警戒が薄れるにつれて、皮肉にも『The New Canadian』にとっては活動の自由が高まったということだろう。困難な状況を逆にチャンスへと転化させるコミュニティ・メディ

ア『The New Canadian』のしたたかさとたくましが、ここでも見受けられる。

そして、日系2世向けの新聞として創刊された『The New Canadian』は、日系人が露骨な人種差別を受け始めたこの時期に、ついに彼等が本格的にナショナル・アイデンティティを見つめなおすためのメディアとして作動し始める。かつて『日刊民衆』を通じて労働者達の組織化に尽力した梅月高市は、同じ組織化でも、今度は「リトルトウキョウのような郷党・地縁に基盤をおくコミュニティ」ではなく、日系人という「エスニック・マイノリティとしての権利を護るコミュニティ」<sup>9)</sup>のために、動き始めたのである。

### (5) 定着期 (1948～)

1948年、さらに東の「複合的移民社会の町」トロントに移った『The New Canadian』の使命は、かつてないほど鮮明なものになった。「『戦時賠償』『帰国(送還)日本人のカナダへの再入国』『戦災日本への救済』『分散・解体の日系コミュニティの再組織化』」<sup>10)</sup>など、カナダの日系人として生きていく権利を護り、獲得するということだ。

だが、同時に『The New Canadian』には別の試練が待っていた。「それは、戦時下や、終戦直後のような日本人・日系人社会での唯一のエスニック新聞ではなくなった」<sup>11)</sup>ということである。メディアとしての役割が明確になり、そしてそのメッセージを共有する読者の数が増えてくるにしたがって、他メディアとの競争の渦に巻き込まれていくという構図が見て取れる。

## 3. 考 察

以上、『日刊民衆』と『The New Canadian』の2紙が歩んだ足跡を時代と事件にそって追ってきたが、ここでもう一度、彼等のコミュニティ・メディアとしての立ち現れ方を、キーワードを使ってまとめてみたい。

(1) 揺籃期 (1920～1935) ……労働者としての待遇改善を求めて「組織化」～労働者に対する「啓蒙」～カナダへの「同化」を志向

(2) 挫折期 (1937～1941) ……メディアとして不可侵な「タブー要素(ここではホスト社会に対する絶対帰依)」を抱え込んだことによる挫折

(3) 混乱期～安定期 (1942～1945) ……御用紙として利用された挙句、排斥されながらも、逆境を利用して日系人の「ネットワーク化」を実現

(4) 確立期 (1945～1948) ……人種差別によってまたもや追放の憂き目にあいながらも、ホスト社会への同化ではなく日系人の権利の確立というナショナル・アイデンティティをより意識した使命を自覚し、コミュニティの「組織化」を志向

(5) 定着期（1948～）……メディアとしての方向性が定まる

労働者の「組織化」から出発して、ホスト社会への「同化」を志すも挫折し、その後も度重なる苦難に見舞われ、時には体制に寄り添いながらも、日系人の誇りを取り戻すべくエスニック・コミュニティの「組織化」へとループしていった『日刊民衆』と『The New Canadian』の足跡から、我々はいくつかの傾向や教訓を見出すことができる。

まず、コミュニティ・メディアとは、送り手と読者との間に大きな目標が共有され、連帯が必要とされる時に立ち現れるが、その内部にタブーが設定された途端、自己矛盾を抱え、やがて滅びていくものであるということ。また、対象とする読者が危機的な状況にある時ほど、読者をネットワーク化し、メディアとして大きく飛躍する可能性が高まるということ。そして、メディアとして目指す目標が達成された時、静かに終息していくものだという事。つまりコミュニティ・メディアとは、個々人の異なる意志の表出とともに生まれ、やがて去っていく「目的志向型」のメディアだということだ。

だから、私はここで、数多くのコミュニティ・メディアを集約するような何らかの理念型を無理に見出そうとしたり、その行く末を予見するような発展段階論的法則性をこれ以上提示したりすることは控えたいと思う。10人が集まれば10通りの利害や思惑があるが、そこから生じる一見ばらばらな意志が、個々人の主体性ととともに、それぞれの小宇宙を形作っていく。その多様な小宇宙こそコミュニティ・メディアを作動させるものであり、またそれをありのままに見つめることが、コミュニティ・メディア研究の醍醐味だと考えるからだ。

#### 4. おわりに

我々を取り巻くメディア環境を見る際に、それぞれのメディアが誰によって所有され、どのようなメッセージを受け手に発信しているかを研究するという手法がある。確かにその手法によって、メディア産業の思惑が我々にもたらす大きな“揺らぎ”の一端は捉えられるかもしれない。だが、そのやり方では、メディアが送り出したメッセージを受け手がどのように消化したか、実際にそこで働くスタッフの思いはどのようなものかといった要素がすっぽりと抜け落ちる。

田村の手法は、それとは全く反対のものだ。徹底的なフィールドワークを重視し、そのメディアがどのような思いのもとに生まれ、消化されていったかをとことんまで突き詰める。それは、幾多のコミュニティの中でもがき続ける個々人の意志の“蠢き”を汲み取り、そこから派生していくメディアのダイナミズムを追うエコロジカルな試みに他ならない。

小さな街の片隅で、世界のどこかで、常に蠢動する数え切れないほどの見知らぬ誰かの思いに、耳を傾ける感受性を持ち続けるということ。

それは、コミュニティ・メディアを研究する我々に、本書を通じて田村が与えた課題でもあろう。

注—————

- 1) 田村紀雄『エスニック・ジャーナリズム——日系カナダ人, その言論の勝利』柏書房 2003年 81頁
- 2) 前掲書 80頁
- 3) 前掲書 111頁
- 4) 前掲書 135頁
- 5) 前掲書 136頁
- 6) 前掲書 150頁
- 7) 前掲書 223頁
- 8) 前掲書 237頁
- 9) 前掲書 337頁
- 10) 前掲書 341頁
- 11) 前掲書 360頁

